「張大人のために負傷をして、張大人のために埋められるんさ。お前たちが大馬鹿さ！」これは、中津が、中津自身に向つて云つてもいゝ言葉だつた。

「それや、不憫ぢやありませんか！　それや不憫ぢやありませんか！」

わい〳〵聲をあげて泣き叫んだ。

殺伐な荒仕事は彼の荒んだ感情を慰めた。

大人は、何らの謀計もなく、意氣地もなく古い首都へ退却した。そして、二ケ年半住みなれた、督辨公署を捨てゝしまつた。ここを捨てれば全然の沒落だ。民心は離反してゐる。張作霖からは、遣責を喰つてゐる。沒落以外に道はない。中津は、それを觀取してゐた。

「くそツ！　今が、あいつとの腐れ縁も見切時かな。」

……彼は、昔の浪人にかへつてしまつた。前線から退却してくると　直ちに、猪川の家へ立ちよつた。竹三郎が、留置場に呻吟してゐる。家に幹太郎以外、男げがない。これも晝間はゐなかつた。これは、彼に、頗る好都合だつた。暫らく、戰線に出て、すゞを見なかつたことは、彼の氣持を枯淡にせしめるどころかむしろ、五十の情熱をかり立てるのだつた。

彼の、すゞに對する感情は、老人が、自分の孫にあたるやうな幼い娘を、老後の斷ち切ることの出來ない慾情から愛づる。——さういふ氣持になるかと思ふと、ええい、戀のへちまのと、上品ぶつたまだるツこいことは面倒だ。いつそ、荒療治で、あつさりと無斷で失敬して行つちまはうか？　その方が面白れえや！　と、この二ツの間を、乘合ひみたいに往復した。彼は、このブラ〳〵する自分の感情を嚙みしめて、そのさきをどうするか、それを空想するのが愉快だつた。

嚙みしめるのが愉快だつた。

中津の、再度の訪問、これは、すゞにも、俊にも、それ程、恐怖を與へなかつた。

市街の、その行きつまつたところには、河があつた。古代より涌き出てゐる城内の泉からつゞいてゐるその水は、音をたてなかつた。丸腰の支那兵が、河馬の群れのやうに、その中へ頭を突ツこみ、濁してゐる。

街の一方は、青鼠の中山服の兵士たちが、蟻のやうに一面に這ひまわつてゐた。他の一方には、土

蠶蠱の中でカーキ服の眼が光つてゐた。シヤモが蹴あひをやる、その前に、まづ睨めッこをして相手のすきを伺ふ、それのやうだつた。何等奪はれるものを持たない乞食や、浮浪漢は強かつた。

すゞも、俊も、お母も、自分達の家が、中山服の蟻と、乞食、浮浪漢の群れの中に、ポツンと一つだけ、存在してゐるのを知つてゐた。そして、それにおびえた。ほかは皆な支那人だ。

山東軍は、退却際に、行きがけの駄賃として、數ケ所で金品を奪ひ、むやみな發砲をした。中山服の眼には敵意があつた。不安は、ます〳〵ひどくなつた。

馬賊上りの、つはものゝ、中津の來訪は、この不安と恐怖に、若干の、主觀的な緩和劑となつたのである。中津は、ピストルがうまい。睨みがきく。彼がゐてくれることは、彼女達を心強くした。

石を敷いた狹いゴミだらけの通りを、え體の知れない支那人が、犬のやうにうさんくさく行つたり來たりする。猪川の家は、石の重い、壁の厚い、支那式の家でありながら、壁に切りあけた窓と、四國の田舍にありさうな、石の築き塀などによつて、すぐ支那人の住家とは見分けがついた。すゞも、俊も、母も、長い、フゴフゴとした支那服を見ると　そのポケットに、ピストルをしのばしてゐる氣がして、無氣味だつた。そして、誰れかにすがりつき度いやうな、あこがれにも似た不安を感じた。

中津は　この家のあつさりとして、華やかな、日本娘の着物や、四國訛のある日本語や、若々しい雞の胸肉のやうに軟らかい、ふるひつきたくなる娘の肉體を、視覺で、享樂しながら、一家の不安に同感し、心配げな顏をしたり、また、特別、力になつてやるやうなことを云つたりした。

お仙は、中津が、朝飯を食ひ、晝飯を食ひ、晩飯を食ひ、夜おそくなるまでゐて呉れるために、心細い財布をはたいて物惜みをしなかつた。

俊は無邪氣だつた。

すゞは、ほかの第三者に對するやうに、こだはらない、馴れ〳〵しい態度で、中津に向はうとすると、氣骨が折れた。何故か、顏が紅くほてつた。中津が強盜、殺人、強姦などをやつてきた、そして多くの人々から、恐るべき蝎として、嫌はれ、おつかながられてゐる。にもかゝはらず、實際は、滑稽な、おかしい、快活な微笑の持主であることは、以前と變らなかつた。これは、すゞにとつて、奇怪で、同時に快よかつた。しかし、中津は、やつて來ると、玄關に這入つた瞬間から、歸へりに、觀音開きの門を出て、なほ、も一度、あとを振りかへるその時間まで、十二時間でも、十五時間でも、その間、一分間も、彼女の、顏や、頸や手から、微笑を含んだ、怖げな眼を離さなかつた。それが、

すゞには、窮屈で、息苦るしかつた。

その執拗な視線は、彼女が、用事をして、こちらからは、彼を見てゐない時にも、やはり注がれてゐた。そのことを、彼女は感じた。

ときどき、彼女は、どうかすると、中津の濃い毛だらけの頑丈な二本の腕が、うしろから無遠慮に自分を抱きしめて、首筋のあたりを、熊のやうになめやなしいかと氣にかゝつた。ぞッとした。兄がゐないと、なほ、この恐怖は強かつた。母もゐなくなると、恐怖と危險は、もつと、もつと身に迫るやうな氣がした。

すゞは、妹と、歩きかねる甥とを頼りにするやうな心持になつた。小鳥のやうに、隅の方にうづくまつてゐた。

幹太郎は、この一家を襲つてゐる二つの恐怖を感じた。同時に、妹も母も、支那兵の亂暴に對する強迫觀念のやうなものは、戰慄する程強いが、中津の恐ろしさは、女達が、殆んど意識してゐないと思つた。殊に、それを氣にとめてゐないのは母だつた。それが、彼は不滿だつた。母は、わざと、中津を家に引き入れてゐるやうに見えた。彼は母と對立した。その氣持は、知らず〳〵、言葉となつて母が感じたかもしれない。

ある晩、マッチ工場の社宅に、六疊の物置が一と間だけ、あけて貰へるから、そこへ金目のものだけを持つて避難してゐてはどうか、と話してゐた。母は、突然、中津を好きやこのんで家へ引つぱりこんでゐるのではないんだ、と云ひだした。幹太郎は、その鋭鋒が、自分にあたつて來るのを感じた。

「一體なんで氣持をこぢらしてゐるんだらう？　お母が、中津と通じたとでも、俺れが、一度でも、もらしたためしがあるんか？」と幹太郎は思つた。「馬鹿らしい、見當ちがひだ！」

彼は、こんな場合の例で、默りこんでしまつた。

「嫌ひなら、なんにも、社宅へなんか行かなくつてもいゝんだ。」

彼は、簡單に云つた。それ切り默りこんだ。母は、ヒステリックに、嫁に來て以來、竹三郎のことや、お前達のことを心配しない日は一日だつてないんだ。それを、支那へまでやつてきて、こんなツラさをするのは一體誰れのせゐだ！　と泣き狂ひになつた。

變に、家の中の機構が、トンチンカンになつた。

翌晩、幹太郎は、妹がゐるところで、

「いつまで中津先生、逃げ出さずに止つてゐるんだい。捕虜ンなつちまふぞ。」と云つた。
「もう、張宗昌について行くのはやめたんだつてよ。」
「何故だい？」
「何故だか知らないわよ。」と俊は、工場から、途中を推何されながら歸つてきた兄に答へた。「ずつとここに止つてゐるんだつてよ。」
「いつそれを云つてゐた？　いつそれをきいた？」
「界首から歸つた日にさう云つてゐたわよ。もう一週間も前に。――兄さんきかなくつて？」
「俺れが、何をきくか！　貴樣、なぜ、それを俺れにかくしてゐた。」彼も、ヒステリックに喚鳴つた。
「――あいつがいつまでも、ここに止つてゐるのは、(彼は、ます〳〵いら〳〵しながら、)すゞをつけねらふとてだぞ！」
「いやだわ。」俊までが、パッと紅くなつた。「そんなことを云ふもんぢやないわ。」
「馬鹿！　馬鹿！　貴樣ら、親爺が、まだ出て來られないのを嬉しがつとるんだらう！」どうしたのか、幹太郎の機構までが狂つてしまつた。二人の妹を睨んで、蹴とばすやうに喚鳴りつけた。「親爺と俺れがゐないから、あんな奴が、のさばりこんでけつかるんだ！　それが分らんのか！」
「爹呀！　爹呀！」
何も知らない一郎が、幹太郎の膝によつてきた。

二十四

鹿埃ツぽい通りの一角に、露天店が擴げられた。支那人は、通りと同樣に、赤銅色に塵埃をあびてゐた。店が財産である。露店のうしろには、半分出來さしの支那家屋ががらんとしてゐた。
青鼠の中山服の群れが通りかゝつた。半信半疑で警戒を怠らなかつた赤銅色の賣手は、店をたゝむひまはなしに、忽ち、中山服に取りまかれた。わめき、罵詈、溺れるやうな死ものぐるひの手と脚のもがき、屋臺の顚覆。……哄笑に腹を波打たして、中山服は散らばつた。皿と笊にもられてゐた一ツの茹卵も、一と切れの豚肉の油煮も殘つてゐなかつた。
中山服は、街をとびく〳〵し歩きながち、快活に口をもぐ〳〵さした。向う側の通りでは、カーキ

服が、棘のある針金を引つぱつて作業をつゞけてゐた。睨みあつた。こちらが睨む。向うが睨む。石が飛んだ。

その時、西はづれの、三倍の抵抗力にやり直した堅固な土嚢壘に、はゞまれた細い通りで一人の支那人をつれた日本人が、着劍の歩哨に咎められてゐた。

「君は、どうも、日本人ではないらしいぞ。」歩哨は、劍をさしつけた。「あんまり支那語がうますぎるぢやないか。」

「私は、日本人でしゆよ。」

「さうかね？」垢まぶれの歩哨は驚いた。

「本當に、日本人でしゆよ。」

その男は、下の前齒が、すつかり拔け落ちてゐた。

「そのチャンコロは何だい？」

「こいちゆは、そのう、今朝、工場をぬけだしゆた、不屆けな工人でしゆ、今、しよいつを……」齒がないために、ふわ〳〵して、發音がうまく出なかつた。二挺の劍が、胸さきで光つてゐる。小山は汗を拭いた。それがかへつて歩哨の疑念を深めるのだつた。軍隊といふものは、非常に有がたいものである。が、一ツ間違へば頗る恐怖すべきものである。小山は、慌てゝ、自分が燐寸工場の職長であること、逃亡を企てた工人を捕まへに行つたことなどを說明した。しどろ、もどろだつた。

一方の、しツかりした顏つきの歩哨は、それでは、小哨長のところまで行つて呉れ、と通りのさきの狹ツ苦るしい暗い支那家屋につれて行つた。歩哨の疑念は晴れぬらしい。カンテラの光に、兵士たちが蠢めいてゐた。

「軍曹殿！　こいつ南軍の密偵であるかもしれません。顏つきと、言葉が隨分あやしいんであります。」面倒なことになつてしまつた！　小山は、あれだけ工場で軍隊を世話してやつてゐながら……と、何か矛盾するやうなものを感じた。

「いよう、どうしたんです？」聞き覺えの聲が暗い隅の方からだしぬけに呼びかけた。

「あゝ、山崎（しやきと出た）さん！」小山は、すぐ密偵の山崎だと悟つた。助かつた！

彼は、歩哨への面あてに、特に、山崎と親しいことを見せつけやうとして、蠢めく兵士達を横柄に

またいで握手した。

黒い支那服の山崎は、同樣な支那服の中津と並んで、片隅の、眠むけな軍曹の前の長い腰掛に腰かけてゐた。

「どうしたんです？」

「ここの兵タイら、これや、わッしゆの工場で厄介を見とる、あの兵タイぢやないんでしゆね。」如何にも兵士など、わしの風しもに立つべき奴等なんだ！　と云はぬばかりの語調で小山は口を切つた。

彼は、朝、早くから、逃亡した工人を追つかけて、汚穢物乾燥場の、汚穢の乾物を積重ねてある蔀俵のかげに、すなんでゐたのを摑まへてきた話をした。

「あれでしゆよ。あいつでしゆよ。」

入口で、眼をウロ〳〵やりながら、慄へてゐる。よごれて蒼い支那人を指さした。二十一歳だつた。額に三ツの瘤があつた。つひさき程、彼に殿られて出來た瘤だつた、紅く血がにんでゐた。

「間のぬけた野郎もあつたもんだね。張宗昌の兵タイにだつて、逃げて捕まるやうな馬鹿はゐねえだ。」中津は嘲笑した。「いつそ、オトシちやどうです。ほかの奴等に、又とない、ええ藥となりますぞ。」

中津の殺伐な眼は、舌なめずりでも始めさうにかゞやいた。

小山は眼を細めて反對しなかつた。兵士が顏をあけて、今更、珍らしげに中津を見た。

睨み合ひと、石の飛ばしあひをやつてゐた方向で銃聲がした。みな、耳を傾けた。山崎と中津は急いで外に出た。山崎は、最前から軍曹に云ひつけて置いたことを、も一度念を押した。

「は、は。」

軍曹は、暗がりの中で、彼の背にむかつて頭をさげてゐた。

通りで、浮浪漢が、銃聲の方向へ物ずきに走せて行く。纏足が、その方向から逃げて來る。又、銃聲がした。まもなく、この小衝突の一方を敷きつぶしてしまふかのやうに、灰色の裝甲自動車が、機關銃の角をはやし、地響きを立てゝ疾馳してきた。犬がうろつく。

「チエッ！　かういふことをやるからいけない！」

山崎は、頭から、自動車の土塵埃にまかれて、親方が弟子の失策を不滿がるやうに舌打ちをした。彼は、彼として深い計畫を持つてゐた。彼は、そのために苦心した。利用し得る人間は、誰れでも利用した。中津も利用される株だつた。

「かういふことをやるからいけない。勝たうと思へば、まづ負けろ！　だ。」

彼は、中津にむかつて呟いた。

「勝つも負けるもねえぢやないか、そこらの蠟は、大砲を持つてきて、一となめに、なめツちまへばいゝぢやないか！」

「それが……すべて、仕事には、大義名分が立たなけや、勝つても、勝つた方が負けとなるんだよ。」

「君等のやることはいつも面倒くさいね！」

山崎は、中津の剛腸さ、支那人の間にきく顔の廣さを好いてゐた。それは、利用できる一ツの財産だ。しかし、この一すぢものでないゴロツキは、ほかの空想に夢中になつて、彼の相談に乘らうとしなかつた。それが氣に喰はなかつた。

――顧祝同が、津浦線停車場と、無電局を占領してゐる。それは最もひどく山崎を惱ました。本國や、世界各國に送る報導は、彼の思ふ通りものでなければならない。そのためには、多少の捏造があつてもかまはなかつた。その通信機關を顧祝同が握つてゐる。それから、蔣介石は、これ以上、天津、北京にむかつて進軍させる譯には行かなかつた。滿洲を確保する上から最もいけないことだ。そこで、何か、大義名分が必要となつてくるのだ。云ひがかりと云つてもよい。それを作るのには、中津のやうなゴロツキを手さきに使ふのが一番いゝのだ。

將校が、横の通りからとび出してきた。

小ぜり合ひは、をさまつてしまつた。二人は、のぞきの看板だけを見物した馬鹿者のやうに、棧の方へ歩いた。

「おい、子供のやうな、あんな娘さんへの日參はよして、ちつと、俺れの仕事でも手傳へよ。」山崎は、冗談のやうに切り出した。

中津は、道を歩きながら、すゞの、手や、脚や、肩や、鼻、口もとなどの美點を夢中に數えあげるやうになつてゐた。彼は、彼女を誘かいする計畫を空想に描いてたのしんでゐた。その計畫がどんなに滑稽なものであるか、そんな點は、考へなかつた。彼は、遮二無二、娘を奪ひ出さうと考へてゐた。そして、それを、計畫し、空想するのが愉快だつた。中津は、山崎が、すゞのことを云ひだしたついでに、こゝろよげに、にこ〳〵しながら、自分の計畫を打ちあけた。

「君は、一體いくつだね？」と、山崎はきいた。

「五十三さ。」

別に、中津は不思議がらなかつた。

「あの娘ツ子は、君の子供ぐらゐの年恰好なんだよ。恐らく、君の三分の一しか年はとつてゐまい。」

「それがいゝんぢやないか。君には、俺れのこの氣持が分らないんだ。あの、軟らかい、子供々々したところが、とてもたまらなくいゝんぢやないか。俺れや、この年になるまで、あんな娘は見たことがない。何と云つていゝか、……俺れの全存在を引きつけるやうな、とても、なんとも云へん氣持なんだ。」

「い、年をして、生若い、紺絣の青年のやうなことを云つてら！」

「そんな輕々しい問題ぢやないよ。俺れや、君がどう云つたつて、この決心は、やめられやせん。」

「ふふふッ。」山崎は冷笑した。「ちよつと、可愛い、娘ではあるが……、しかし、君なら、あの娘のおツ母あが丁度持つて來いだ。あの婆さんと夫婦なら似合つてら。どうだい、あの親爺はヘロ中で領事館に叩ツこまれとるし 婆さんをひとつ、ものにしちやどうだい？　それなら、俺も手を貸してやるよ。」

「冗談はよせやい。——あんな腐れ婆にや、あき〳〵してゐら。何と云つたつて、俺れや、處女でなけや駄目なんだ！　處女の味は、又、特別なもんだ！　二度とあんな娘は手に入れやしない！」

小山は支那家屋の兵士たちに、糞喰へ！　のやうな顔をして、そこを立ち去つた。捕まへられた工人は彼のあとにつゞいた。

二十五

竹三郎は、領事館警察の留置場から、S病院に出た。

彼は、瀬戸引きの洗面器の縁で、自分の足の小趾をぶち切つた。

それで留置場から出ることが出來た。內地から來たての、若い外務省巡査が、しけこんだやうな顔をして、彼を監視して病院へついて來た。

マッチ工場で、蔣介石の抗議による守備區域の障害物の徹退、南軍と、日本軍との衝突の危險、などについて、軍隊自身よりも、支配人が氣をもんだもんだ。社員は、朝からそはそはした。

工人が、北伐兵の過激派と策應しないとも限らない。十時頃、幹太郎は、親爺が、S病院に出たこ

とを知らされた。

お母と、だぶ〳〵と詰襟の支那人が、咎めたてる巡警をつきのけて、いきなり事務室へとびこんで來た。彼は吃驚した。

お母は、息を切らし、蟲がつめた子供のやうな眼をして、どういつていいかわからないものゝやうに、何も喋れなかつた。幹太郎はそれを見たゞけで、直ぐ、すゞがかつぱらはれたのでないかと不安にされた。

「早よ、S病院へ去。あなたのお父ッあん、負傷あります。日本太夫、診て、出血あります。クワイデ。」

詰襟の善人らしい支那人は、日本語と、支那語を、ごちやごちやに使つた。早く、幹太郎に用談を傳へようとあせる。距離のある眉と眉の間に、皺をよせた。あせるほど、日本語は舌の先でもつれてしまつた。業を煮して、たうとう、支那語ばかりで叫んだ。分つた。

幹太郎は、輕蔑の眼を、小山とかはして冷笑してゐる支配人に、むッとするものを抑へて、一言、ことはつた。そして、すぐ、病院の方へどび出した。兵士たちが、街上に撤退する担馬を重さうにひ

きづつてゐた。

「一寸、待ちなさい。」母があとから呼んだ。

「……。」

幹太郎は、母だと知りつゝわざと返事をしなかつた。

「一寸、待ちなさい！」母は繰りかへした。

「何ですか？」彼は怒つたやうな聲を出した。

「これを持つて行かなけや駄目なんだよ。」蟲がつめた子供のやうな母は、門鑑の巡警の前に立つてゐた。「これがなけれや駄目なんだよ。」

帶の間から、少さい、紙の小匣を取り出した。「快上快」だ。

「家は大丈夫ですか？」

幹太郎は、云ひ度くないと思ひながら、やはり中津が氣にかゝつて口に出してしまつた。

母は、何をきかれたのか解しかねて默つてゐた。

「家は、すゞと俊で大丈夫ですか？」

「あゝ」と母は無心に云つた。「今、さつき、出しなに、長さんが、すれちがひにやつて來た。大丈夫だよ。」

「中津がやつて來た！　——何をやり出されるか分らんぢやないですか！」

「……」

「あんたは、こゝからお歸ンなさい。」幹太郎は小さい行きかゞりの感情にこだはつてゐられないと思つた。きツぱり云つた。

「お父さんは、どうなんだらう。」母は躊躇した。

「すゞと俊では、どんなことをせられるか油斷がならんぢやありませんか。」

「でも……」

やはり、夫が氣にかゝるらしかつた。どうなとなれ！　これ以上強ひることは出來なかつた。母は病院へ急ぐ彼のあとから、詰襟の支那人と二人でついてきた。

彼は、中津のあぶない陰謀に、うすうす感づいてゐた。母と喧嘩をしながら、それでも蜿曲に、家を留守にしないやうに繰りかへしてゐた。母とすれちがひに中津が家へやつて行つた。——それは、

彼には、中津が、卑猥な會心の笑みをもらしてゐる有さまさへ想像せられた。そして、不安はますます強くされるのだつた。

竹三郎は、領事館の留置場で、ヘロインがきれてしまつた肉體を、我慢が出來るだけ我慢をした。しかし、どうしても、二十九日の拘留期間を我慢し通すことは出來なかつた。彼は、監視の若い巡査の輕蔑と、冷笑をあびながら、唸き死ぬばかりに、ばたばたと肉體的にもだえ苦るしんだ。

昔、村會議員になつた。ほかの收賄をやつた連中を摘發してやらうとした。そんな時代の颯爽とした面かげは、全く失はれてしまつた。外科病室の白い、ベットで、看護婦達に押へつけられながら、あばれてゐる黃色ツぽい、死にかけた黃疸患者のやうな、親爺を見つけて、幹太郎は、まづ、それを思つた。誰れが、かういふことにしてしまつたか！　俺達は、誰からも保護をうけてはゐないのだ！　日本人の特典は、貧乏な者には　通用しない特典だ！

若い、男まへの、支那人の醫者が、骨ばかりの右の足のさきに、繃帶を卷いてゐた。卷かれながら親爺はうめいた。

醫者は、一見、日本人のやうな感じがした。親爺のちぎれた趾からは、紅い血が、ガーゼで拭かれ

たあとへ、スッスッと涌きあがつた。白い繃帶は、巻くそばから紅く染つた。

監守の支那人が、いまいましげな顏をしてそばに立つてゐた。幹太郎が這入つて行くと、領事館からついてきた、帽子にエビ茶の鉢巻のついた若い巡査は、二人が、ちよつと顏を見合して室外に出た。

幹太郎が、「快上快」を親爺に與へるために持つてきた。それで巡査は氣をきかして場をはづした。

——そのことは、幹太郎の方へも、すぐ感じられた。

親爺は餓死した屍のやうに、くわん骨はとび上り、眼窩は奥の方へ窪んで、喘ぎ〳〵呻いてゐた。

「いつそ、この際、再び魔醉藥を與へぬやうに我慢さして、悪い習慣を打ちきる方がいゝんだ！」と息子は思つた。

親爺は病的に落ち窪んだ眼で、息子を認めると、扉の外の巡査に聞えるのもかまはず、むづかる子供のやうに「快上快」を求めた。

「チエッ！　仕方がないなァ！」

藥は與へられた。

竹三郎は、如何にも、うまさうに、むさぼり吸つた。たてつゞけに、一と匣分の痲醉藥を吸つてしまつた。

「苦るしうて、苦るしうて、やりきれんからたうとうこんな藝當をやつちまつた。洗面器で足の小指をぶち切つた。——そうでもしなけれや、留置場からは出られねえんだ。俺れがどんなにのた打ちまわつとつたつて、領事館の奴はへへら笑つてゐやがるんだ。」

母と、詰襟の支那人がやつてきた。竹三郎は、足の疼痛を忘れた。自分を取りかこんだ者達にはしやぎ、唇には、足らん男のやうな微笑さへ浮んだ。

「全く、ヘロインの虜になつちまつたんだ！」と幹太郎は思つた。「自分の指を切り落してもヘロインが吸ひたいんだ！　指とヘロインの交換！　支那へさへ來てゐなければ、そんなことになれやしなかつたんだ！　あの村から追ひ出されさへしなければ、こんなことになりはしなかつたんだ！」

彼は恐ろしい氣がした。

「もうないか。……もつとねえか、吸はせろい！　吸はせろい！」

親爺は、また、子供のやうにせびりだした。

支那には、この竹三郎のやうに、外國人の手によつて持ちこまれる阿片や、モルヒネや、ヘロイン

の捕虜となつてゐる人間がどれだけあるかしれないのだ！　阿片のために、どれだけの人間が、癈者となり滅されつゝあるか知れないのだ。……

二十六

額の禿げ上つた、見すぼらしい跛が、炎熱と塵埃にむれてゐる石疊の小路へ這入つた。

ヒヨク〳〵して、外見は、いけつない歩き方をしてゐた。が、身輕るくさツさと歩いた。

暫らくすると、それが、這入つた石疊の小路から引つかへしてきた。以前より、もつと身輕るく、片チンバの脚で飛ぶやうだつた。やがて、洋車を呼ぶと、一足とびにとび乘つた。

「早くやれッ！」

洋車は、塵埃と炎熱の巷へ吸ひこまれて行つた。

小路の奥の、石塀の中の一ッの家では、すずが、安物の手ミシンにむかつて、ドレスを縫つたり、ほぐしたり、又縫つたりやつてゐた。眞直に、平行に行かない縫目が彼女に氣に入らないのだ。

天むきの鼻の一郎は、顔ぢゆうが眼ばかりのやうに見える。眼が大きく光つてゐた。去んだトシ子そつくりだ。彼は、俊のそばに這ひよつた。俊がよんでゐるビラを小さい手で荒ツぽく引つたくらうとした。

ビラは、蔣介石の出したビラだ。學校の、漢文讀本の漢本とも、またいくらかちがふ。俊はなかなかそれが讀めなかつた。

「ま、待つてなさいよ。」

手で摑み取りに來る一郎を彼女は追ひやつた。玩具の犬をやる。

——國民政府は、この地方に限り、租稅を全額免除する。……

一郎は、犬をはうつた。そして、また手を擴げて摑みかゝつてくる。ビラは皺くちやになる。俊はそれをのばして、またよんだ。

——張作霖、張宗昌、强盜、强姦、賣國的……

ふと、一郎は、兩手で彼女の手からビラを叩き落してしまつた。紙はずた〳〵になつた。まだ、よみさしである。

俊は、それが惜しいとは思はなかつた。彼女は、何か考へてゐた。すゞは、一心に、ミシンに注意

を集中してゐる。針が急速に、規則的に上下する。縫目がジャリ〳〵と迸られて行く。

「ちよつと、あの人、今日、何だか變にをかしかつたわよ。」

「なァに？」

すゞは空虚な返事だつた。

「なにか、たくらみがありさうだつたわよ。あの怒つたやうな眼で、じろ〳〵家ン中や、私達を見て行つただけぢやないわ。眼と、口もとの笑ひ方に、恐ろしい何かがあつたわよ。」

「さうかしら。」

猫のやうな俊は、先日からの中津の行動をいろ〳〵に思ひ起してゐた。恐ろしい何かの兆候が、二三日も四五日も前からあつた。

「ちよつと！　ちよつと！……」

俊はまた姉をよんだ。……

支那宿の東興棧の一室には、張宗昌の退却後、變裝をして市街にとゞまつてゐる中津の仲間が集つてゐた。四五人だ。荒つぽい、無茶な仕事が飯より好きな連中だつた。せゐの低いずんぐりした唐は、素手で敵の歩哨に摑みかゝつて、のど笛を喰ひ切り、銃と劍を奪つてくるやうな男だつた。金持ちの娘や、細君を、人質にかつぱらつた經驗は、みんなが三回や、五回は持つてゐた。

中津は、何回となく空想で練り直した掠奪の計畫を、實行する段になつて、なほ、心は迷つてゐた。いつそ、根本からよしてやらうか。孫娘を可愛がるやうに、可愛がるのはいゝことだ。その方がいゝかもしれん。こんなに迷ふことは、嘗てなかつた。が、仲間には、それは、おくびにも出さなかつた。ともかく實行方法を話した。仲間を三臺の自動車に分けて乘らす、日本軍の守備區域を走る時には、山崎に云つて、誰何されない交涉をした。和服の娘を無理やり積みこんでゐるのを歩哨に目つけられると面倒だからだ。南軍の駐屯してゐる區域にさしかゝると、兼て手に入れておいた、青天白日旗を自動車に立てる。さういふことにした。

二臺の自動車は、街を流してゐる。中津は娘を、おびき出してそこへ、歩いて通りかゝる。さきの

一臺が、急停車をする。刹那に、踊り出た仲間は娘を車中へさらひこむ。中津は、うしろの車に乗つてあとにつゞく。かういふ風にきめられた。妹も、子供もついてくれば、三人共、さらつて行く。そして、こゝから約四哩の黄河の沿岸の灤口まで、一息にとばして、そこから天津方面へ落ちのびるのだ。かういふ計劃だつた。若し、すゞが、中津のさそひに乗らなければ、五人が屋内に押し入つて行くつもりだつた。暴力で拉致するよりほかはなかつた。金は銀が五百元あつた。それから通らない、紙幣が三千五百元あつた。

中津は、なほ千圓ほど工面をしなければならなかつた。

同宿の山崎は、頻りに、この暴擧を思ひ止まらせようとするのだつた。けちくさい男だ。中津にはそれが、金を貸すのが嫌ひだからとめてゐると取れた。それは急所を突いてゐた。そして、彼はとめられればとめられる程、意故地になつた。

「よさないか、おい、そんなことは……」と。山崎は云つた。「紲票にかつぱらふんなら　まだ分るが鐚一文もない軟派の娘をかつぱらつてどうするんだい。ええ、冗談ぢやないぜ。」

「默つてる玉へ！」中津は、時刻が迫れば迫る程、動搖をかくして、糞落ちつきに落ちついてゐることを示さうとした。

「君が、芯からそんなに熱心なら、なにも、かつぱらはなくたつて、結婚を申し込めばいいぢやないか。野蠻な暴力的なことをやらなくたつて、正式に娘を貰へばいいぢやないか。それなら俺れだつて賛成だ。」

「馬鹿云ひ玉へ！」と中津は笑つた。「張大人だつて、北京の東安市場へ行く途中で、ちよつと見た別品を早速、自動車へかつぱらつて、タイタイとしやつたぢやないか、俺等にや結婚申込なんて、お上品なやり口は、性に合はねえんだ。ほしいものは、どんどん遠慮なしにかつぱらつて行く方が、はるかに、面倒くさくなくつて愉快ぢやないか。」

中津の仲間の赫富貴は、濁つた眼を細めながら、賛成するやうに頷いた。

「やつぱし、君等は、馬賊の習慣から、ぬけきれねえんだ。」

中津は笑つた。

「そんなことゝいふのは、理窟ツぽいあの娘の兄と君だけくらゐなもんだよ。この廣い支那ぢゆうで。」

「いいや。俺れや眞面目に云つてるんだ。君のために。」

「眞面目もへつたくれも有ッたもんかい！……氣に入れや、かつぱらつて嚊にするし、いやになれやボイボイ賣ッとばすんだ。世話がなくつて、どれだけ氣しよくがいいか知れめえ！」

「あんまり增長するなつてよ！　俺れや歩哨線の通過なんか知らねえぞ。」

「ふふふ。——知らなけや、知らなくッてもいゝさ。その代り俺れの方もバラシてやるから、——ネタはいくらでも豐富に摑んでんだぞ。」

これはおどかしだつた。

集まつた五人は、出發前の酒杯をとつた。五人に較べると、山崎は、まだ、どこともなく日本人くさい感じが殘つてゐた。さかづきをすゝめてもプリッとしてのまなかつた。その身肌につけてゐる五挺の、全部彈藥をこめたピストルは、大掛兒の上から、胸に二挺、兩脇に二挺、右の腰のポケットに一挺と、一寸した服の凸凹によつて見破られた。——このケチン坊、なかなか金を溜めこんでけつかつて、人には貸さうとしやがらねえんだ！　中津は、忌々しげに考へた。畜生！　こいつは、支那へ奔放自由な生活をたのしみにやつて來てゐるのぢやないんだ。小金をために來てやがるんだ！　チエツ！　くそツ！

自動車がやつてきた。

も一度、中津は正式に嫁に貰つて、孫のやうに可愛がつてやつたら！　と思つた。

その方が平和で、その方がよかつた。が、もう一歩を河に踏みこんでゐた。どうせ、激流でも渡つてしまはなければなるまい！

「さア、出かけるとしようか。」彼は立ちあがつた。

「ボーイ、毛布はどうしたんだ？」眼を細めて贊成した。

積んどけ。」赫は又、快よげに眼を細めた。「——街ンなかを通る時にや、女をすつぽり頭からくるんどかないと、今日びの物々しい戒嚴では、一寸、仕事がむづかしいからな。あのカーキ服の歩哨に猿轡をはめた女が見つかつた日にや最後だよ。」

五人の者は、身支度を整へて、廊下へ出た。二階の窓硝子から通行人のポケットへ手を突つこんでゐる青鼠服が見えた。ボーイは毛布をもつてきた。

「それぢやないよ。ロシヤ毛布ぢやないか。」

赫は大聲で呶鳴つた。

中津の金のバラ撒き方は荒かつた。向ふにゐた別の、少女のやうな美しいボーイが、赤茶色のロシヤ毛布を手にして馳せ出してきた。

「うむ、これこれ。」赫は階段のところでそれを受取つた。手のこんだ、厚い、いくらか、はしッかいやうな毛布だ。赫は、ちよつと、兩手をひねらした。と思ふと、一瞬に、スッポリと美しいボーイを頭から毛布にくるんでしまつた。

「噯呀！」ボーイは不意打ちを喰つて、びつくりした。

「どうだい、かうやるんだ。」自分の手に入つたやり方を誇らしげに、赫は、ほかの者達を見まわした。

「かうやればもうしめたもんだ。」

中津は滿足げに笑つてゐた。

山崎は、この五人のゴロツキどもを、なほ、未練げになにか釣錢でも取つてやりたいやうに見送つてゐた。

自動車は、太馬路から、拒馬や、鐵條網が、頑張つてゐない、緯四路へ出て、七馬路で永綏門の方面に曲り、日本軍の警備區域でもなく、南軍が散在してゐる區域でもない、その中間の線を選んで迂

廻した。中津は、洋車で十王殿へ乘りつけた。

おびき出した娘をかつさらツちもふのは、館驛街に於てやる。打合せが濟まされてゐた。

中津は、洋車からおりた。一間時ばかり前に、飛ぶやうに這入つて飛ぶやうに出てきた石疊の小路を、又とぶやうに歩いて行つた。アカシヤの靑葉が風にさらさらと鳴つてゐた。その下を、彼は進んだ。

跛をひきながら、しかも、靑年のやうに元氣な足どりで。足が地につかぬものゝやうだつた。

門はしまつてゐた。

中津は、王錦華を呼んだ。內部に人の氣配がする。それだのに返事がなかつた。又、彼は呼んだ。

數言の强迫的な文句の後、かんぬきが、ガチッとはづされた。中に支那人のボーイがおづおづと立つてゐた。

「どうしたんだ！」

「はい。……いらつしやいませ。」

「どうしたんだ？」

屋内には、つひさき程まで、ミシンをかけてゐたすゞが、縫ひさしのドレスをそのまゝに見えなかつた。俊も、一郎もゐなかつた。

「どうしたんだ？」

中津は勝手を知つてゐる部屋々々を急速に一巡した。身體だけで、何物も持たずに逃げ出したあとがあつた。——「感づきやがつたな！　どつかへ、かくれたな。逃げ出しやがつた！」

暫らくうろ〳〵してゐた。自動車で待ちかねてゐた連中がどやどやと押しよせてきた。

掠奪や亂暴がすきな連中だつた。

佛壇をはねかへした。抽出しをぬいた。中の快上快と、銅子兒が、がらくたのやうに床の上になだれ落ちた。

體裁よく飾りつけられた屋内のさまざまなものが、片ツぱしからめちやめちやに放り出された。めぼしいものは、五人の手が、それを摑み取ると、慌てゝポケットへねぢこんだ。

娘の掠奪がいつのまにか、家財の掠奪にかはつてゐた。それも彼等には、非常に面白かつた。

二十七

幹太郎と、お母は、病院から家へ歸らうとした。洋車に乘つた。

何處からともなく、小銃の音が五六發聞えた。

花火だと思つた。

街を、憚悍な蒙古騎兵の一隊が南へ、砂煙を立てながら、風のやうに飛んで行く。

カーキ服の兵士達は、着劒した銃をさげ、ばらばらとそのあとへ現はれた。豆をはぜらすやうな、小銃の發射は、方々ではげしくなつた。諱六路へさしかゝると、俥夫は、おぢけづいて、しりごみした。

「早くやれッ！　家へ歸つてみなけやならんのだ！」

諱五路まできた。壁が厚い洋館の二階から發射される彈丸が、ヒウヒウと、街路の上をとび交ふた。兵士が走る。はだしで、シヤツの前をはだけた日本人が走る。紅い繻子の、前髪の女が、ころげさうに走る。

そこから、諱三路まで、突ッきつて行く。その間が、幹太郎自身も、危險だと感じずにゐられなくなつた。

「早くやらんか！　なに、マゴ〳〵してゐるんだ！」

「旦那、いけましねえ。いのちあぶない。」

「かまはん！　やれ、やれッ！」

しかし、苦力は、どうしても進まなくなつた。

これは、彼の家の掠奪に引きつゞいて急激に起つたことだつた。將に崩れようとする家は、一本のくさびをはづしても、巨大な屋臺骨が、一度に、バラ〳〵に崩解してしまふものだ。喧嘩買ひには、袖がちよつと觸れるだけで十分だ。それが、結構云ひがかりとなる。

中津の略奪が市街戰のキッかけとなつた。中津の亂暴を見て、附近にうよ〳〵してゐる青鼠服が押しよせて來た。家は叩き毀された。それをきいたカーキ服が馳せつけた。射擊ちあひはすぐ始まつた。そして、瞬くひまに全市にひろがつてしまつた。まるで、用意をして、待ちもうけてゐたものゝやうに。

猛烈な、有名な市街戰が、これから引き起されて行つた。

KS倶樂部の土間は、命からがら、身をもつて逃がれて來た人々で埋まつてゐた。

避難者は、そのあとから、まだ、まだ押しよせて來た。

青鼠色の南兵に、出口をふさがれ、壁を破つて隣家へ逃げ、支那服を借りて、通りかゝつて洋車のあと押しをして、苦力に化けてのがれてきた者があつた。妻が南兵に拉し去られるのを目擊しつゝ、自分だけ、のがれてきた男があつた。毛布、風呂敷包をかゝえて來る者。サル又と繻袢だけの者。父親の脊に脊負はれて、身體の具合が惡いやうな泣聲で泣く眼が赤い小さい子供。

「まあ、百々ちやんはえらいんですよ。私がつれて避難して來る時に、若し、南軍に摑まつたら、どうするかつてきくとね、おッ母さんと一緒に剃刀でのどをかき切つて死ぬるッて云ふんですよ。」腹にボテのある呉服屋のお上は、一人だけ得意げに癇高く喋つてゐた。「本當にえらいでせう。これこそ日本男兒ですわね。」

彼女は、十歳ばかりの鼻の平たい子供を高く抱き上げて人々に示した。

「まあ、これこそ、本當に日本男兒ですわね。」

知つてゐる人間の顏を見ると、この太ッちよの牝鷄は、相手の心配をかまはず、誇らしげに、これを繰りかへした。

すゞと、俊とは、この土間の片隅に、人々に押されて、小さくなつて蹲つてゐた。一郎を南軍に取られてしまつた！　彼女たちは、父親の背でむづかる眼の赤い子供を見て、始めてそれを思ひ出した。どこで失つてしまつたか？　はつきりした記憶がなかつた。

ひつかへして探しに行くのは、命がけだつた、彼女は、自分の身を守るだけに力いつぱいだつた。

——また、おほぜいの女達が足袋はだしで、どや〳〵と飛びこんできた。詠仙里の娼婦だつた。支那兵が女郎屋街に這入りこんだ。娼婦はすつかりあわてゝしまつてゐた。

裂けたワイシャツに、ズボンだけの男は、アンペラに腰をおろすことも出來ず、彈丸よけに毛布を垂らした窓の傍に突ッ立つて、唇をかみしめ、ポケットに、片手を突ッこみ、光つた眼で前方を見つめてゐた。ぢつとしてゐられない樵夫が、その身體全體に現れてゐた。妻と子供を見失つてしまつた人だつた。

「まあ、小出さん！　おききなさい。うちの百々ちやんはね……」

また、牝鷄がうるさく繰りかへしだした。

すゞは、中津らが彼女の家へ押し入つてきた時、俊と一郎と三人で隣の馬貫之の棕櫚を張つた床篦子の下で少さくなつてゐた。それを覺えてゐる。たしかに三人だつた。寢臺にも、寢具にも、その附近すべてに、支那人の變な臭ひがしみこんでゐた。

家の方では、大勢の荒々しい足音と、罵る叫聲と、破壞の騷音が渦を卷いてゐた。板をはぎ取るめりめりボキン。戸棚が倒れる轟音。硝子が割れる音、壁がどさる音。

恐る、恐る、彼女は床篦子の下から這ひ出て窓に近づいた。そして、眼だけを出して外をのぞいた。石疊の、無氣味な小路に、紺鼠服の兵士が、いつぱいうごめいてゐた。

彼女の手ミシンを小脇にかゝへて、向ひ側の小路へ消えて行くよごれた男があつた。針金の鳥籠が

踏みへしやがれてゐた。

よく隣の馬貫之の細君にかくして貰つたものだ。

誰れか、外から門を叩く音がした。殺しに來た氣がした。

荒々しい足音が近づいた。彼女達は呼吸をとめて耳を澄ました。

馬貫之だ。

「あなたがた、ここにゐては危いです。早く便所にかくれなさい。」——馬貫之は親切だつた。

便所へ逃げた。

そこも、見つかり易かつた。困つた。もひとつ隣の支那人の家が、この便所にくツ附かうとする、そこに間隙があつた。俊は、無中に六尺の塀をよぢのぼつた。そして、その間にとびおりた。そこはよかつた。すゞもあとからつゞいてとびおりた。

五六人の足音が、塀の向側でどやどやと椅子や箱を蹴散らしてゐる。

便所にも來る樣子がした。塀がドシンと蹴られた。耳をすました。話聲は支那語だ。中津だらうか南兵だらうか？　どつちにしろ見つかれば殺されるか、裸體に引きむかれるかだ。

家と家の間隙は、反對側の小路に通じて開いてゐた。慌てゝ、白足袋跣足で、逃げて行く人かげが細い間からちらツと見えた。着劒のカーキ服が馳せて來る。何も考へるひまはなかつた。その小路へとび出した。

そして、人が走つて行く方へ一目さんに走つてしまつた。前にのろ〳〵と行く者は、押しのけて走つた。一郎はどうなつたか忘れてしまつてゐた。

KS倶樂部へは、あとから、あとからといくらでも避難者が押しよせて來た。いつのまにかういふ大動亂になつてしまつたか？　彼女達は不思議に思つた。彼女の家が市街戰のきツかけとなつた。それは知らなかつた。惡いのは南兵だ。多くの人々も、勿論、さう思はせられた。さう思はせつゝでも事件のきツかけは中津のやうな反動のゴロツキが必要に應じて作つてゐるのだ。さういふことは勿論知らなかつた。

遠いところや、或は近くで、大砲や銃聲が斷れ〳〵に、又、つゞいて響いてゐた。大砲が發射されるごとに、硝子窓は、ビリビリッと震動した。頭をめちや〳〵に斬られた人が這入つてきた。何時間かゞ過ぎた。

男の者が外に出て米をといだ。

飯が出來ると、その男たちは、自分の知つてゐる者や、女郎ばかりに飯を配つて、向うの方の人々は、腹いつぱいに食べてゐた。が、知り合ひでない者には一杯もあたらなかつた。すゞと俊とは自分達がのけ者にされてしまつたやうな淋しい感情に滿された。兄がゐれば、飯を食べさして貰へるだらう。ふとすゞは、そんなことを思つた。紅い着物の娼婦達は、もう澤山といふのに、なほも一ツづゝの握り飯を强ひられてゐた。

やうやう、向ふの人々の食つた殘りの飯が、櫃の底にちよつぴりまわつて來た。一段下の別扱ひをされたやうな腹立たしさがした。しかし、それを食ひ逃がしたら、又、いつ飯を食べられるかわからない。

みんな、我れさきに、その飯をよごれた手に摑んで取りがちをした。それは悲慘ながきのやうな有樣だつた。

夕方、人々は、S銀行の宿舍へ、移れといふ命令をうけた。ここでは防ぎきれないからだ。と云ふ。すゞは、俊の手を、しつかりと手を握りしめた。彈丸があたらないやうに壁に添ふて大通りへ出た。

いつもはにぎやかな大通りが、がらんとして、犬の子一匹も通つてゐなかつた。時々、銃聲がぱツぱツときこえた。

「あれ見なさい！　あれ……南軍め、澤山やられとる。」

子供をおぶつて、走せて行く、鬚の男が、走せながら、郵便管理局の構內を指した。

「何だらう？」

すゞはちらつと、指さゝれた方へ顏を向けた。

鐵條網を引つぱつた柵の中に、武裝解除をされた紺鼠の中山服の兵士達が、兩手を後に縛られて、獸のやうに、呻いたり、わめいたりしてゐた。何十人ゐるか？　何百人ゐるか、數がわからない。着劍した銃を持つて、四五人のカーキ色の兵士が、ばらばらと立つてゐた。

ふと、俊が、何か叫ぶと、彼女の手を重く引いて、地上にがくツとへたばつた。

「どうしたの？」

俊は、流彈に脚をうたれてゐた。白ツぽいメリンスに血がにじんでゐた。

「どうしたの？」

傷の痛さよりも、彈丸にあたつた意識が、すつかり、張りつめた氣持を奪つてしまつた。俊は、どうしても立ちあがれなかつた。ほかの者は、どん〳〵彼女達を抜いて走つた。

すゞは、妹に、自分の肩へすがらして、背負つて立上つた。二人だけが一番最後に取り殘されてゐた。たび〳〵重い妹をすり上げた。つめたい血が、せわしくかはす、ふくらはぎに、ぱた〳〵流れかかつた。

……人々は、S銀行の舍内のゴザの上で、一夜を過した。二枚のゴザの上に、十三家族が坐るのだ。

醫者はなかつた。すゞは、ハンカチを裂いて、うたれた紫色の俊の太股をしばつた。

二人には、ゴザの端もあたらなかつた。板の上に坐つた。

「そこでは痛いでせう。これに坐んなさい。」

お齒ぐろをつけた小さいおばさんが、自分のねまきをござの代りにひろげた。

すゞは、そのおばさんの顏を知らなかつた。しかし、その上で血で、ねまきを汚さないやうに氣をつけながら俊に脚をのばさした。

二人は、並んで、おばさんの、ねまきの上に寢た。

「あゝ、恐ろしいこつた。今日中にどれだけの人間が殺したり、殺されたりしたか、數が知れまい。」

と、おばさんは吐息をして、なむあみだぶを唱へた。「……すつかり財産を失つた人がどれだけあるか知れまい……百ではきくまい。家を壞されてしまつた人だつて、どれだけあるか！……あ、あ、怖いこつた！　怖いこつた！」

なむあみだぶ。

なむあみだぶ。

夜はふけた。俊は、齒を喰ひしばつて疼痛を怺へようとしたが、唸きが、ひとりでに、その齒の間から漏れた。

大砲は、なほ遠くで、靜けさを破つて轟いてゐた。人の叫聲や、犬が吠えるのがきこえる。電燈だけが、ます〳〵明るくなつてゐた。憲兵の靴が、廊下にコツトン〳〵とひゞいた。

翌日、お晝すぎ、二人は、脚を怪我した父と母がゐる病院へつれて行かれた。

そこで、俊は手あてを受けた。

二十八

軍隊と戰爭には、殺戮と掠奪はつきものである。

戰爭が起れば、必ず、掠奪が行はれ、徵發が行はれ、殺人が行はれる。

これが、利害に應じて、誇大に報道される。又、利害に應じて、反對に、默殺され終る。

この日の、虐殺された邦人は、二日後に土の中から發見した九人をも合はして十四名だつた。

內地のブル新聞には、それが、二百八十名と報道された。

新聞は、婦人を裸體にして言ふに忍びざる慘酷な嬲り方の後、虐殺した、と書いた。娘は極所に棒を突きこまれ、腕の骨を棍棒で叩き折られ、兩眼をくりぬかれた。と書いた。

特派員の眼前には頭蓋骨を叩き割られた死體の腦味噌が塵の路上にこぼれてゐると知らせた。

掠奪についても、同樣な報道がせられた。

貴重品や被服は勿論、床板、疊、天井板をひつぺがし、小學生の敎科書をまでかつぱらつた。そして、金鎖、金時計、大洋二百四十元、紙幣三百八十元を强奪された。その遭難者の談が載せられた。

それを讀んで、南軍を憎まない人間は、どうかしてゐる。暴兵を全滅せしめるのが當然だと憤らない人間はどうかしてゐる。

それほど誇大な報道の力は强かつた。

國民の輿論、敵がい心、兵士達の向ふ見ずの勇氣、憤激などは、かういふ報道から不可避的に作り出されて行くのだつた。

山崎は、これを理解してゐた。そして、利用した。

三日目に、彼は、津浦線ガードの東北の畑地で、新らしく盛られた土饅頭の下から、埋められた慘殺體を發見した。

新らしい鍬のあとが明らかな土饅頭は、何となくあやしげだつた。

掘りかへした。

一人の女と、二人の男がなまなましい、酸ッぱい臭ひを放ちながら横たはつてゐた。更に、そこから僅かばかり隔つた亞細亞タンクの附近にも六名の死體がかくされてあつた。左右の耳が斬りそがれ、ある者の腹は石をつめこまれてふくらんでかたくなつてゐた。

十王殿も、館驛街も、多くの家が掠奪と破壞のために、ごたごたにひつくりかへされて見るかげもなくなつてゐた。

支那服の山崎は、そこを見てまわつた。——これを知らしてやらなければならない。と、彼は考へた。兵士たちにも、邦人にも、內地へも。

職業的な感覺から、彼は、これを知らせば何が起るか、それはよくわかつた。十名內外を二百八十名と言ひふらす偉大な效果を、この男はよく知つてゐた。戰爭は、國民を興奮と熱狂の狀態に誘導しなければやり得るものではない。敵を極惡に宣傳しなければならない、第三者の同情を引かなければならない！　彼はこれをよく知つてゐた。……

彼の友達の中津が、まツさきに、侵入して掠奪した家は、十五殿に、バラバラの空骸となつて殘つてゐた。これがきツかけとなつたのは、彼にとつて、もツけの幸ひだつた。乞食がそこへ這入つてゐた。第一回の掠奪の後、放りさがされて散らばつてゐる、壞れ椅子や、アンペラや、柄が折れた娘の洋傘を盜み出してゐた。

「さうだ、これが猪川の家だつけ。」と彼は思ひ出した。

「ここを南軍の奴等が掠奪したのが、戰爭のもとになつたんだ！　さうだ、非は南軍にあるんだ！」

この得手勝手な男はその前に立ち止つた。壞れた厚い壁のかげで、乞食はこそこそやつてゐた。

「おい、山崎さん！」

耳に不快な記憶のある聲が背後でした。

「あゝ、陳先生！」

ドキリとしたものを、山崎は取りつくろつた。

S大學へ學生に化けてしのびこんだ。それ以來、酬いを約束しながら、幾度かはぐらかして一元も渡さずにゐる陳長財だつた。

「どうです。景氣はどうです？」

——陳は複雜な笑ひ方で山崎を見た。

「あゝ、そいつか、——そいつは、また今度だよ、このどさくさに、そこどころぢやねえんだ。」

「また今度？　また今度？」陳は繰りかへした。「……何回でもそんなことが云へた義理ぢやあるめえ！」一歩を山崎に詰めよつた。誰の力で、アメリカの秘密を具體的に摑むことが出來たんだ！　誰

の力で貴様が手柄を立てたんだ！　その眼はさう云つてゐるやうだつた。

「厄介な奴がついて來やがつた！」と、山崎は考へた。「いつそのこと、この、どさくさまぎれに、片つけツちまはうか。」

彼は、歩き出した。

陳はあとからついて來た。

どこまでも、尾行のやうに、あとについてきた。館驛街に出た。緯一路へ曲る角にきた。山崎の右の手は、前後左右に眼をやつたかと思ふと、大掛兒のポケットに行つた。

次の瞬間、豆がはぢけるやうな、ピストルの響きが巷に起つた。殆んど同時に、陳長財の手元にもニッケル鍍金のものがピカッと光つた。

しかし、陳は、引鐵を引くひまがなかつた。ピストルを持つた手を壞れた屋根の方へさしあげビリビリッと胴慄ひをして、がらくたものが散らばつてゐる街上に重くドシンと倒れた。

「くたばりやがつた！」

山崎は歩いた。このピストル一發で、陳に渡す三百元が、自分の懐へころげこんだのだ。それを思ふとぞくぞくした。

彼は、邦人の家が掠奪された有樣や、兩耳を斬られた女の屍體、腹に石を詰められた男の屍體、それを、兵士達や、避難民や、內地の大衆に知らしてやる必要があつた。そのことを考へた。世界中に知らしてやる必要がある！……

司令部の前に來た。

「止れッ！」

歩哨の聲は彼の耳に入らなかつた。

「止れッ！」

やはり彼は、何事か考へながら歩いてゐた。

そこは、北軍退却の以前から嚴重な服裝檢査と警戒のあるところだつた。孫傳芳の自動車もそこで停止を命じられたりした。

自動車の主は引きずりおろされた。ポケットはさぐられた。

「俺れは、孫傳芳だぞ！」

金モールの額のはげ上つたおやぢは、じだんだを踏んで口惜しがつた。

「俺れは、孫傳芳だぞ！　無禮者め！」

けれども、歩哨には、直魯聯合軍司令もヘッタクレもあつたもんぢやなかつた。すべてが同じだつた。任務をはたすだけだ。

「チエッ　孫傳芳ッて何だい！　ごつけな、いい金モール服を着てやがつて、どこの馬の骨だい！」

山崎が通りかゝつたのはこの歩哨線である。歩哨は、支那服の、支那人くさい男を咎めた。

「止れッ！」

山崎は、自分の支那服を忘れて、すつかり日本人のいい氣持になつてゐた。慘酷な情報で、群衆の熱情をあほり立てる、その沸騰する有樣を、夢中に想像してゐた。話してやる！　知らしてやる！……そして、誰何されるのは、ほかの支那人だと感じた。そんなつもりだつた。

「止れッ！」

まだ、彼は氣がつかなかつた。

つゞいて銃聲がした。

五挺のピストルと、八千圓の預金通帳を肌身につけて離さなかつた山崎は、ぱたりひつくりかへつた。

くたばつちやつた。たうとう！

二十九

飛行機がとんできた。

市街の上空にさしかゝると、それは、糞をする鳥のやうに、續けさまに黒いかたまりを落した。スーッと空中に線を引いてボーンと地響きがする。投下爆彈！

三機である。くの字形に距離を置いてとんでくる。古巢のやうな、この街の上空に大きな圓を描いて翔けめぐつた。西端の上に來た。その中の一ツは、ポツと硝子だまのやうにはぢけた。すると、すぐ、火花が散つた。そして機體は黒烟を吐き、火焰となつて、つばさは、眞二ツに折れ、眞直に、大地をめがけてもぐるやうに墜落した。

市街戰はすんだ。

兵士たちは、ぐたぐたに、二日半の休息を得た。酒。一週間吸はなかつた煙草を二日で吸ひ戻した。街路の到るところに支那人の屍體がころがつてゐる。

酸ッぱい臭氣！　無數の唸る蠅。

毛並の房々とした野犬と、乞食が、舌なめずりをしながら、愉快げに、野犬は尾を振り立てて屍體の間をうろ〳〵してゐた。

爆破された無電局の、天に突きさゝるやうなアンテナ柱は、半分どころからへし折れ、傾き、倒れかゝつてゐた。振りかへる者もなかつた。直す者もなかつた。黒い土のやうな人間が、その下にころがつてゐる頭蓋から腦味噌をバケツに掻き取つてゐた。

不意に出動！

午前四時、疲勞が直り、性慾が頭を擡げかかつた頃である、兵士達は、急然と叩き起された。

柿本は、支那商館の石の窓口から、とびこむとき、向う脛をすりむいた。沃丁を塗つたあとが化膿して、卷脚絆にしめられる袴下は、傷とすれた。びつこを引きながら整列に加はつた。東の空が白みけかたばかりだ。高さ四丈、幅七間、周圍三里の城壁を攻撃するのだ。リンとした寒い中隊長の號令。

目に見えぬ顏。重藤中尉は、軍刀を摑んで歩いた。鐵條網を丸めて、片方にのけた狹い出口から兵士たちの列伍は、電柱傳ひに行進した。

路は、露で、しツとりとしてゐた。靜まりかへつてゐる。步調の揃つた靴の音ばかりが、ザックザックと暗い空へ吸ひ込まれて行つた。S病院の西側には、低い力のこもつた號令で、砲兵隊が、がちや〳〵車輛をゆるがして砲列を敷いてゐた。兵士たちは默つて進んだ。青みかかつた雲は、東方からさしてくる赤い日の出に、薄紫色に染めぬかれて、ゆるやかに動いてゐた。明るくなる。

墜落した飛行機に棟を折られた民屋は、甲羅をへしやがれた蟹のやうにしやがんでゐた。兵士たちばかり。家に人氣はない。草は人間に踏みにじられて姿も分らなくなつてゐた。

だん〳〵高取や、木谷や、那須などの顏がはつきり見分けられるやうになつてきた。でくの坊のやうに、銃をかつぎ、背に、飯盒をつけた背嚢を喰ひつかせて步いてゐた。

戰爭の恐怖以外に柿本は、中ン條の小母が子供を殺され、家がすツかり掠奪され、明日から宿も、食物もない心配で、くしや〳〵してゐた。折角、俺れがやつて來てゐながら、どうにもしてやることが出來なかつた！　高取らが、でくの坊の馬鹿のやうにして步いてゐるのにも理由があつた。忍從し

してゐるのだ。

中隊は破壞しつくされた街に這入つた。窓硝子、扉、壁、屋根、すべてが滅茶苦茶だ。籐張りの女の下駄が片脚だけ放り出されて、靴にあたつた。兵士たちは、石の高い頑丈な家と塀とをまわつて、廣い荒らされた、草ッ原に出た。そこをはすかひに橫ぎつた。縫ふやうに、細い道を折れ曲つた。

太陽は、壞れたぎざ〳〵の屋根の間から輝かしく、鮮かにぬッと浮び出た。空の方々に散在してゐたきれぎれの雲は、どこかへ消え失せてしまつた。また暑くなる！　ぐた〳〵したすべての物が、強く照し出された。

中隊は大通りへ出た。城壁の外門へ一直線である。外門の上の建物に、靑天白日旗が、ひら〳〵と飜つて見えた。

どこかで、何かの合圖が聞えたものゝやうだつた。と、遙か彼方の砲列を敷いてゐたあたりから、砲聲が轟き渡つた。つゞく。空を唸つて、前方で爆發する。それに應じるもののやうに、反對の東の方で、銃聲が連續して起つた。柿本は、腓腸が、ぴく〳〵、ぴく〳〵と顫へた。そして全身で身顫ひ

した。

その時である。中隊の縱列は、だしぬけに、側面から射擊を受けた。中隊長は、耳のすぐ上で、數發の銃聲がパチ〳〵とひゞいたのをきゝとめた。T病院の二階からだ。柿本もそれをきいた。銃聲は杜絶えた。

「あ、あ、あんなところから不意打ちを喰はして居る！」

特務曹長は、なさけなげな聲を出して、アカシヤのかげにかくれるやうに伏せをした。兵士たちは顏を見合はした。ひとりでに、微苦笑が口をついて出た。同時に、彼等は、たまげちやつたやうな中隊長の散解の號令をきいた。

「そら、また、ここへ突ッ込めだぞ。」

高取は、にた〳〵意味ありげに笑つて、どつしりとした玉田に云つた。柿本にもそれが聞えた。

「なんだ、何も居れやせんぢやないか。」

玉田は、頸をあげて、二階建の病院を見まはした。それが終らないうちに、右翼は、重藤中尉が先頭に立つて、開き扉を押し割り、着劍した銃を突き出し、クレゾールくさい室內へ突入してゐた。つ

づいて兵士がどや〳〵となだれこんだ。白い服の看護婦がちら〳〵してゐた。ベッドには病人がねてゐた。肋膜炎、腎臓炎、胃くわいよう、心臓瓣膜不全症――内科と外科は別だつた。多くの部屋を區切つた扉は、次々に、バタン、バタンと突きあけられた。手術臺の厚い硝子は、龜列が入つた。

これが、その當時の記錄に「第×××聯隊が、逐次暗夜を辿りつゝ城門に近づかんとするや、俄かにその北側にあるT病院内より支那兵の猛射を受け、危險極まりなきに到つたが、該建物が病院たるの性質にかんがみ、一時、其措置に窮した。しかし、何分、事態急迫し、躊躇すれば、暴兵の亂射のため、多大の損害を受けざるを得ぬので、N大尉は一部隊を以てこれを驅逐せしめた。常時、急迫の場合の措置として、寔に、止むを得なんだのである。云々」と辯じてゐる事件である。

約三十分の後、兵士たちは、不愉快な記憶を腦髓にこびりつかして、病院を引きあげた。不愉快な記憶は、一日中、とれなかつた。翌日も、それは取れなかつた。柿本は氣がすゝまぬ樣子で、澁々と動作をした。そして何か、自分でも分らないやうな考へにふけつた。――「　　」が壁に突きさ

さつた。そして、

そんなことがあつてもいゝもんか！」悔恨のやうなものに苦るしめられた。「あの顏色の蒼い女は、口をあけて、何も知らずベッドの中でねむつてゐた。……毛布に三角の小さい孔があいた。さうしてあの女は、……俺れの子はあの時顏へた。力が、腕から急に抜けてしまつた！　さうだ、俺れらは、

！」

彼等は、隊伍を直して城門にむかつた。攻城戰は既にたけなはになつてゐた。タラッ！　タ、タ、タ、タ、タッタ！　機關銃が城門の內と外から應呼して、迅く、つゞけさまにひゞき渡る。ちよつと、きれたかと思ふと、又、ひゞく。榴彈が城壁で炸烈してゐた。

高取や、玉田や、松下などを見ると、彼等は、むツつりして、蟲を喰つたやうな顏をしてゐた。訓練所出の、倉矢までが、浮かぬ顏で何か考へこんでゐた。――「さうだ、あいつらも、みんな不愉快な記憶に心臟をしめつけられてゐるのだ！」と柿本は思つた。

なるのだつた。何者かに取つつかれたやうだつた。

、その判斷がつかなく

同胞の日本人が慘殺された。掠奪された。天井裏の板一枚まで剝ぎ取られた。と、彼らは、その現象だけを問題とした。そして、一人が殺されたその倍がへしをせずにゐられない、憤怒と、情熱と、復仇心を感じた。——感じさせられた。

その憤怒と、その情熱と、その復仇心とが、いはゆる「敵」をやツつけるのに最も重要な要素となるのは、爭はれなかつた。

この情熱によつて、彼等は、市街戰で殺された日本人の屍體を蹴とばした。

何のために、それをやつたか！　誰れのためにそれをやつたか！

三十

翌々朝、六時。

大陸の燒けつくやうな一日は、既に始まつてゐた。

兵士たちは、マッチ工場の白揚材置場の片隅に整列した。

敏感な重藤中尉は、上官の直視を避けるやうな兵卒の眼つきに注意をとめた。動搖と、士氣の沮喪と、いや〳〵乍ら行動する奏え切らないものを彼は見た。前々からの兵卒の間に釀されてゐた××な空氣を彼は感じた。卽座に、誰れかゞ、かけにかくれて、何かやつてゐるな！　と思つた。

勇敢で、單純で、感情的な重藤は、自分の扱つてゐる兵卒の要求と、本能を直感的に見拔く銳敏な才能を持つてゐた。

彼は、その自分の感じによつて、兵卒が、上官の眼の行き屆かないかけで、何かこそこそやつてゐるのを知つてゐた。たちが惡い。明かに信服しなくなつてゐる。高取は、職長を毆りつけて、工人への給料を全額、暴力で拂はしてゐた。それ以來、少くとも、五六人の兵タイは、國家のために出征してゐるのか、工人と一ツとなつて不屆き至極なことをやるために來てゐるのか、區別がつかなくなつてゐた。彼は、中でも、特に、高取に最も注目してゐた。なほ、多くの兵士らも、自身から、高取の言說に心をひかれてゐる。それも分つた。それには、理由がなければならない！

人事をやつてゐる特務曹長もこれに氣づいてゐた。特曹は、支那の共產黨員と、何か共謀して事をたくらんでゐると、重大視してゐた。しかし、重藤は、その點、どうせ兵卒のやることだ、どんなに

したつて、大したことは出來ない、と高をくゝつてゐた。

彼は、整列した兵士たちの眼に、動搖と、不平とある意氣地なさを見ると、すぐ原因を高取らのこそ〳〵に歸した。そして、こんな日に限つて負けるんだ。と考へた。無數の負傷者が出るんだ。大きなしくじりをやるんだ！　彼は顏をしかめた。

高取は、一番最後に、卷脚絆を卷き直して、靴を引きずり、整列に加はらうとしてゐた。彼は高取につめよつた。橫合ひから、頰を殴りとばした。故意に、兵士達、皆んなに見えるところでやつた。

「おい、高取、なまけるな！」

「……。」

「お前は、國のために働くのが嫌ひなのか？　そんな奴は謀叛人だぞ。」そして、もう三ツぶん殴つた。

「分つたか？」

「……。」

高取の眼は、眼窩からとび出して、前へ突進して來るやうに燃えてゐた。何のためにいきなりやられるのか譯が分らなかつた。

中尉は、高取の眼が氣に喰はなかつた。ぷーンとした態度が滿足できなかつた。

「こらッ！　不眞面目にすると、お前のためにならんぞ！」と、彼は呶鳴つた。

「どうしたんでありますか。」

「こらッ！　高取やめろ！」彼は軍刀をガチヤッと鳴らした。「俺れは、お前の腹の中を見すかして居るんだぞ。お前のやつとることは、何一ッ殘らず知つとるんだぞ。お前は、自分で、何をやつとるかその恐ろしさを知らんのだ。」

「何も、やつて居りはしねンであります。」

高取は、一寸、まごついた。が、すぐ、光つた眼で中尉を見つめた。

「よせ！」重藤は、儼然と云つた。「俺れは何もかも知つて居るんだぞ！」

「はい、何ですか？」

償勤兵となつた彼は、これまでにも、幾度か殴られた。蹴られた。指揮刀が歪むほどひッぱたかれた。彼は、何回となくそれを忍んできた。ほかの者だつて、そんなに異ひはしなかつた。「かうして、この結果、俺らが現にやらせられてゐるのは、何であるか？　自分で、

そ　！

×××××××××！　××××、×××××××××××。」

×××××、×××××××、××××××××××。×××、××××××××！　××××。××××××××××！　×××、××××××。

××××××、××××××××、××、××××××××。×××××、×××××、××××××××××××××××××　××××××××××××、×××××、×××××。×××××××××。×××××××。×、××××××××、×××××××××。×××、×××××××××××。

××××××××。

「××、××××、××××××××××××？　××？　××、××××××××××××××××××××××。

「××、×××、×××××××××？　××？　××、××××××××××××××

×××××××××。

×××？」

「××××××××××、××××××××××××××。」

「××、——××××××××××××。（×××××××××××。）……××××××××××！　×××××××××××。」

「……。」

重藤は、それ以上、突ッこまなかつた。大膽不敵な彼も、多數の前には恐怖した。彼は、兵士たちの顏色を見い見い、言葉を切つた。しかし兵卒を扱つて來た經驗から、自分の云つた命令が、實行されないかも知れないといふ疑念を、絕對に素振りに出してはいけない。自分の命令は、必ず、確實に實行されるものだ。と、信じ切つてゐる。さう兵卒に見せる。それが必要であるのを心得てゐた。そして、その態度を取つた。高取の態度は、決して、彼に滿足を與へるどころぢやなかつた。しかし、彼は、これで、注意はすんだといふやうに、身體のこなしを一新して、整列した兵卒にむかつた。

三十一

兵士は藁人形のやうにバタバタと倒れた。

方振武は頑强に、城内に踏み止まつてゐた。

どんな妨害に抗しても、天津へ、北京へ、攻めのぼらずには置かない意氣を示した。城門はかたく、なかなか破ることが出來なかつた。城壁が厚かつた。青天白日旗は、いつまでも元氣よく、その中に翻つてゐた。弱くない。武器も新しい。

蔣介石は、日本のどんな要求でも容れるから、たゞ、こゝを通過して、天津、北京を攻撃することをゆるせ！　と提議した。それが、いれられなかつた。そこで、支那兵は意地になつた。

ほかの部隊が各々、西北角や、泰安門や、新建門を占領して行くに從つて、柿本の部隊の幹部は、やつきになつて自分の持場を攻めあせつた。パタパタ倒れる者が多くなる。幹部の功名心と競爭心は兵士に重量がのしかゝるやうに出來てゐた。柿本らにも、それが眼に見えて分つた。卷脚胖を解くひまもない。へと〳〵になつた。つらくツてたまらない。鐵砲の照準をきめながら、フラ〳〵ツと居眠りをしたりした。

戰友が、どこで、どうしてゐるか分らないまでに、ごた〳〵に入り亂れた。市街は、燒火箸が降るやうな暑さだ。

アカシヤの靑葉が黃風に吹きちぎられ、土煙にまじつて、目つぶしのやうに街を飛んだ。その晩、靑鼠服は、射擊を中止した。兵士たちは、工場へかへつて脚をのばした。午前二時頃、彼らは、恐ろしい夢にうなされた。宿舍の二百人ばかりのつはものが、同時に、息の根をとめられ、うーツと唸つて、現で立ちあがつた。苦るしまぎれに、兩手でむちやくちやに空氣を引ツかいた。

これは、內地で、早足行進に、どうしてもすねが伸びない初年兵が、敎官にボロクソにこづきまわされて、古いお城の松の枝で頸を吊つて死んだ。その晩にうなされたのと同じ現象だつた。その時にも、中隊全部が、息の根をとめられた。唸つた。そして同時に眼がさめた。何と說明していゝか分らない。

「これは、何か不吉なことが起つてゐるぞ。」

「俺れや、自分がしめ殺されたと思ふた。……つらくツて、どうしても息が出來なかつた。」

「誰れかゞ、今、現に、やられてゐる！　無理、無法にやられてゐる！」

正氣づくと、彼等は云つた。

「高取はゐるか？　高取！　高取はゐるか？　どうも、俺れには、高取が、誰れかと一緒に眼のさきへやつて來たやうな氣がしてならん！」

柿本が、まだ、幻影を見てゐるやうな顏をして云つた。

冷やツと、身が底へ引きずりまれる感じがした。

翌朝、高取と、那須と、岡本と、松下、玉田が歸つてゐないことが分つた。誰れしも、不思議がりながら、口に出しては、何も云はなかつた。眼と眼でものを云つた。木谷と柿本が、病院の負傷者と屍室の屍體をしらべた。ゐない。夕方になつた。まだ歸らない。翌々朝になつた。まだ歸らない。

交代した歩哨は、寢不足と夜露で蒼くなつて、宿舍へ這入つてきた。消息がない。

高取らの指揮者の、重藤中尉は、いひ猿に頰ッぺたをなめられたやうな顏をして、どこからか歸つて來た。室の隅の木谷と柿本は、身に疵があるのに、強てそれをかくして笑ふやうな中尉の笑ひ方に目をとめた。

木谷の直觀は、その笑ひ方に、ぴたりとかたく結びついた。彼は、中尉の心の狀態が手にとれるやうな氣がした。

「どうだい、今日は、灤源門の攻擊だぞ……。」

「さうですか。」

木谷は、ご氣嫌を取るやうに近づいてくる相手の疚しげな顏つきに、平氣な、そッけない聲で答へた。

「××、××××、×××××××××××××××××××××××××。」

「×××××。」

××、××××××、×××、×××××、××××××、××××××××！

×××、××、××××、××××××××××××××××××××。××××××××××、×××××、××××××××××。×××××××、××××、×××××、×××××××××××。××××、××××××、×××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××。×××××、×××××、×、××××、×××××××、×××××××。××、×××、××××××××××××××××××。×××、×××××××、×××××××。××、××××××、××××××××××××××。

「××、×××××、××××、××××××××××××××××××××××××××××××××。」××××××、×××、×××、××××、×××××、××××××××××××××××××、×××

×××××××。

×××、××××、××、×××、×××××××××××××××××××××××××、××××、

××××××、××××××××××××、××××××××××××××××××、×××××××
××××××××°××××××××××°
「××××、××、××××××××××××××°」
「×××××××°××、××××××××××××××°」
「×××、××××××××××××××――××××××、××××××、××××××
××××××××××××、……××××××××××××××××××」
「××、××××××××××××××-」
「×××、××××××××××××××、××××××××××××、××××××××××××
××××°……××××××××°××××××、××××××××××××××××××°××××
××××××××××××××××××××°××××、××××××××××、×××××××
×××、××××××××××××××°」××××××××°「×××、××××××××、×××
××××××°×××、××××××°××××××、××××、××××××××××××××
××××××°×××、××××××××、××××××××××、×××、××××××××××
××××××××°××××、××××××、××××××××××××、××××××××××××
××××、××××××××××××××一」

その高取がゐなくなつた。

柿本には、最後の言葉だけは、まだ、意味がはつきり分らなかつた。

幹部は、城内に頑張つてゐる南軍よりも、土匪よりも、アメリカ人よりも、猿飛佐助のまく傳單や高取や、工人たちと一つになつた兵士の赤化を一番に、氣にやんでゐた。それを一番怖がつてゐた。

それは爭はれなかつた。

三十二

この日、また、死もの狂ひの猛烈な攻撃が試みられた。

午後三時、柿本は、ゴミの中で城壁のかげから飛來した彈丸に肩をうちぬかれた。一群の負傷者にまじつてトラックに搖られ病院に來た。

負傷兵は、どの病室にも、いつぱいにあふれてゐた。擔架にのせられ、歩ける者は歩いて、あとからどん〳〵這入り得るだけの密度で、病室につめこまれる。外科病棟は、ぴつしりとなつてゐた。內科病棟と、傳染病棟の一部にも、負傷者は這入つてゐた。

柿本が入れられたのは、支那人を追ひ出した、支那人への施療病室だつた。白ペンキが禿げた鐵寢臺、汚點だらけの藁布團、膿くさい毛布。敷布や、布團藏ひはなかつた。普通の病室よりは惡かつた。煎りつくやうなのどの乾きと、傷が生命を奪つて行く、それとの戰ひ、疼痛などで、病室は、檻のやうなわめきで、相應呼してゐた。

各部署の戰鬪のはけしさは、負傷者の數と、思ひ切り無遠慮なその負傷ぶりによつて完全に表現されてゐた。

「砲兵の榴散彈で、城門近くの歩兵がやられて居るんだ。照準が間違つて居るのにめちやくちやにうつて居るからだ。味方の頭の上で味方の彈丸が炸烈してゐるんだからな。」

負傷者を運んできた擔架卒は、ベッドの脇で、にが〳〵しげに呟いた。

「南軍の遺棄した彈丸を使つてるちゆうぢやないか。」

「ふむ、さうかもしれめえ。そんなことをするから着彈が狂つて、味方の砲兵が、味方の歩兵を殺すんだ。」

「チエッ！　そんなこともあらうかい。もともとろくでもねえ戰爭だ！」

　××××××××××××、××××××××××××、××××××××××××××××××

×××××××、××、××××××××××、××××××××××××××××××、××××

×××××××××××××。×、×××××、××××××××、××××××××××××××

×。

「×××××、×××××××××。××××、×××××。――×××××××××××××××

××××××××××。」×××××××××××××××××××××、×××××、××××××

××××××××。「×××××××、××××××××××××××××××××××××××！

××××××××、×××××××××。××××、××××××、××××××××××！」

　××××××××××××

　××××、×××××××。×××、×××××××××××、××××××、××、×××××

×××××××××××××、×××××××××××。×××、×××××××、×××××××

×××××、××××××、××××××××××。××××××××××。×××××××××！

×××××××××××××！　××××××××××××××××『×』××××××××。

「無理をするからだ。誰れにだつて出來ねえことを、一と息でやつて見せようと見榮坊を張つてやがるんだ！」

黒岩は、傷の痛みを感じるよりも、神經が立つてゐる話し振りで話した。

「どこの部隊だつて、兵タイにや、最大限度の馬力をかけさしてるんぢやないか？」

と、柿本は、ふいに、横から云つた。

擔架卒は、ちよつと默つて不思議げに彼を見た。黒岩は、柿本だと知ると、口もとに、笑ひのかけを浮べた。

「さうかもしれんて。」

「さうだよ、さうにきまつてゐるよ！　この數しれん負傷者は。――戰爭は、隊長の功名心の競爭場だよ。さういふ風に出來てゐるんだ。それで支那兵は、徹底的に追ツぱらつてしまふさ。俺れらは、隊長の踏み臺にせられて手や脚を落すさ。ははは、隊長は隊長で、その功名心に、又、もうひとつ上からあふりをかけられてゐるんだ。勳章といふね。上にや、上があらあ。」

「その一番下は俺らぢやないか。」

「うむ、その俺らの上にや、重い石が、三重も四重もにのつかつてゐら！　畜生！」

のんきな軍醫は、兵士の苦るしみや、わめきや、悩へきれなくつて手足をばた〳〵やるのが快よいものゝやうに、にこ〳〵しながら、平氣で處置をつゞけてゐた。血糊でへばりついたシャツを鋏で切つた。

「一將功成り、萬卒倒る、か。」

兵タイの不平を小耳にした彼は、詩吟の口調で、輕るく口ずさんだ。

柿本は、その軍醫の手あてを受けた。そして、白い、新しい病衣を着た。

城壁は、翌日、午前中、陷落した。ベットに坐つて彼はそれを聞いた。傷の疼痛は、だん〳〵に少くなつた。肩の負傷は、歩くことには一向差支なかつた。三日目に、木谷と山下が見舞に來た。

「おい、柿本、どうだい。」木谷は、男性的な澁い聲で叫んだ。「高取らがやられてゐたぞ！　五人とも黄河の河畔で、犬に喰はれて白骨が出てゐた。」

多分そんなことになつただらうとは感じてゐた。が、現實にそれをきくと、柿本は、ぎくツと心臟が突きのめされた。

「さうか、やつぱしさうだつたか。あの晩にうなされたのは、だてや、冗談ぢやなかつたんだな！」

「今、五人とも、屍室へ運んできてゐる。」

「一體、誰奴にやられたんだ！」黒岩が云つた。「誰奴がやりやがつたんだ。犯人は、はつきり分らんか？」

「默つてゐろ！　それをきいたつて無駄だ。」木谷は、嚴肅なそ振りで手を振つた。「云はなくたつて分つてゐる。あいつだ！」

「あいつて？」

「あいつだ！」

暫らく彼等は無言でゐた。

傷ついた肩から玩具のやうにブラさがつてゐる片腕を、三角巾で頸に吊つて柿本は、木谷らと、屍室へ歩いた。大腿骨が碎けた黒岩は動けなかつた。踏み折られて泥にまみれた草は、それでも、又、頭を持ちあげようとしてゐた。アカシヤは、風にもかゝはらず、なほ一層青々としてゐた。屍室には、看護婦や、患者や、兵士や、街の人々が、入口と窓の

外に、黒山のやうにたかつてゐた。五人の、犬にしやぶられた遺骸を見やうとつまさきで立ちあがつてゐる。

高取たちは、もう、暑さで腐爛してゐた。酸つぱい鼻もちのならぬ腐肉の臭ひと、線香の煙がもつれあつて、嗅覚を打つた。どれが高取だか、那須だか、玉田だか分らない。白布で蔽ふてあつた。殺されたまゝ放任されてゐたのだ。捜索隊が行くまで、毛のむく〳〵した野犬どもが集つて、舌なめずりをしながら、しやぶつてゐたさうだ。

「この肉體のどこから、俺等をうなしに來たんだらう？」

山下が、いぶかしげにきいた。

「それや、何か分らん、俺れにや、どう説明していゝか分らないよ。」と木谷が云つた。「しかし、奴等は、俺等の武器が奴等にむかつて突ツかかつて行くのを怖がつて、先手を打ちやがつたんだ！　あいつらの利益を守るためには、あらゆるものを犠牲にしてかへりみないのだ！」

三人は、芝生の土手を越して、塹濠のある草ツ原に出た。大きなアカシヤのかげには火葬場が作られてゐた。

「俺れらだつて、ひとつまちがへば、やられてゐたかもしれないんだ。」と、木谷は、塹濠をとび渡つて小聲で云つた。「あいつらは俺らが怖いんだ。だが、今度、俺等が劍を持つた日にや、先手を打たれやしないぞ。まづ、あいつらの心臓を串ざしにしなけや置かないんだ！」

三十三

——後記——

半分しか肉がついてゐない五名の兵士は、「名譽の戰死」といふことになつた。

棺に納められ、石油をぶつかけられた彼等の肉體は、火葬竈の中で、くさい煙となつて消えて行つた。

内地の彼等の親たちは、本當に、彼等が、憎むべきチャンコロの彈丸にあたつて戰死したものと思ひこんでゐるだらう。

出兵の結果、支那には、排日、反帝國主義運動が、かへつて強くみなぎつた。破壊しつくされた灤源門には「誓雪此恥」「你看見麼？」「你記得麼？」と、民衆の心に火をつけてゐる。しかし、日本ブル

ジョアジーは、出兵當初の目的とした「滿蒙殖民地の確保」は、一時的にせよ、殆んどそれを達成した。喰へない男、張作霖の爆死や、蔣介石と結ぶ揚宇霆の銃殺などによつて。日本のブルヂョアジーは、武力によつてでも、滿蒙を握りしめ、完全に、それを屬領化しなければならないやうになつてゐる。そのために、あらゆる力を、そこに傾注してゐる。これは、やがてアメリカとの對立を鋭くし、必然、帝國主義戰爭を捲き起すもとゝなるだらう。

福隆火柴公司の工人達は、その後立ちあがつた。——これは、あまり筋書き通りになりすぎる。が、事實立つた。社宅の女房達は、又、いつかのやうに自動車でKS倶樂部へ逃げ出した。そして、彼女達は、永久に社宅へは歸らなかつた。

それから、最後に、猪川幹太郎は、ドサクサ騷きに、家も、仕事も、子供も、すつかり失つてしまつた。彼は、マッチ工場を馘になつた。

一郎は、どこで、どう失はれたか、皆目分らなかつた。恐らく支那人にツマミ殺されたのだらう。彼は、それを殘念がつた。トシ子によく似た子供を失つてしまつた。それが惜しかつた。しかし、また、一方、殺されたなら殺されたつていゝとも思つた。

だが、ある日である。

彼は、以前の住居の十手殿附近をブラ〳〵歩いてゐた。破壞のあとはまだ恢復してゐなかつた。街は、一層きたなく、ホコリツぽかつた。支那人が生大根の尻ッポをかぢつてゐた。

「爹呀！　爹呀！」

ふと、彼の足もとへ近づいて來る者があつた。汚い支那服を着た子供だつた。頭は支那の子供のやうに前髪と、ビンチョを置いて剃られてゐた。

「爹呀！　爹呀！」

よち〳〵とその子供は、遊んでゐるほかの子供の仲間から離れて歩いてきた。

見ると、それが一郎だつた。

馬貫之の細君が、辻の枝が裂けたアカシヤのところに立つてゐた。彼は、思はず、子供を抱きあげた。

一郎は、馬貫之に助けられてゐたのである。

武裝せる市街 終

昭和五年十一月十日印刷　武裝せる市街

昭和五年十二月十七日發行　定價五十錢

著者　黒島傳治

發行者　鈴木利貞　東京市麹町區九ノ内二ノ一八

印刷者　君島潔　東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所　共同印刷株式會社　東京市小石川區久堅町一〇八

發行所　株式會社　日本評論社　東京・丸ノ内・昭和ビル　振替東京一六　電話九ノ内(23)　四一三一　四一三二　四一三三

新作長編小說選集

或る時代の群像	青野季吉	
稚き闘士	葉山嘉樹	
燃える森林	平林たい子	近刊
陰謀	細田源吉	
砂糖	細田民樹	近刊
暴動	伊藤永之助	
魚河岸	金子洋文	
異國の戰爭	小牧近江	
女工戰	今野賢三	
武裝せる市街	黒島傳治	
支那から手を引け	前田河廣一郎	

四六判 三百頁 ・ 日本評論社版 ・ 各冊 五十錢

日本プロレタリア傑作選集

蜂起	藤森成吉	急行列車、田園騒動、散彈、蜂起
誰が殺したか？	葉山嘉樹	淫賣婦、誰が殺したか？海底に眠るマドロスの群
敷設列車	平林たい子	敷設列車、勞働者の妻、施療室にて、夜風、森の中、醬油工場、壁新聞
血	岩藤雪夫	ガトフ・フセグダア、二つの心臟、吹雪、鷗供養、血
赤い湖	金子洋文	赤い湖、闘爭する二十三人、傳右衛門の手記、農民一揆戰
太刀打ち	片岡鐵兵	太刀打ち、染の花月夜、強い男は居る、あんな男こん な男、爭議小話、この生活
密偵	林房雄	密偵、讀賣版の奇蹟、百合子の幸福、梨枝子の趣味、老妓と風呂番、自由勞手の歌、篤員章、外二篇
不在地主	小林多喜二	不在地主 救援ニュースNo.16附錄
氷河	黒島傳治	海の第十一工場、氾濫、氷河、渦巻ける烏の群、春の一圓札事件
セムガ	前田河廣一郎	長江進出軍、セムガ、太陽の黒點
暴力團記	村山知義	暴力團記、老給仕人、愚劣な中學校、弱い兵士、水雫、老婆との別れ、男の子、十字軍、辱められた映畫、外一篇
能率委員會	徳永直	能率委員會、プロマイドを捨てる、カツトされない場景、眼、馬、あまり者、何處へ行く？

新四六判 二〇〇頁 ・ 日本評論社版 ・ 各冊 三十錢

資本

シンクレア著
前田河廣一郎譯

世界的傑作の完全な邦譯

この小說の描破力は絶妙といはねばならない。こゝには重疊した事件のマッスが深い急流のやうに流れてゐる。この小說は無慈悲である……この長篇を讀まないことは巧みな鋭敏な、正直で飽くまで皮肉な而も完全に益する所ある書物を見逃すことだ。——サタデー・レビユウ・オブ・リテラチユーア。

四六判 五一〇頁　日本評論社　定價一・五〇 送料一一